

「自分になればいい」に 気つくまで…構成(放送)作家

北原ゆき (高44回)



●きたはら・ゆき
飯田市出身。高校時代ソフトボーラー班に所属。キヤッチャー。
日本テレビ『スッキリ』、NHK『頑張れ！引っ越し人生』『ダイゴ味！TV』、テレ東『昼めし旅』などを担当。

高校時代から映画監督になりたくて、2年生の時に東宝や松竹に直接電話し「どうしたら映画監督になりますか？」と質問。すると「映画の専門学校などへ行くよりも人生経験をすることが大事です」と言われ、大学受験をせねばと決意しました。ただ…すみません。いや、両親にすみません。1浪しました。

青学受験で聞いた幸せの鐘

1浪した年の受験当日、あと40分で試験が始まるというその時に、人生で初めて「渋谷駅」に降り立った私。あまりの人の多さに方向を見失い「きっと大勢が歩いて行く方に違いない」と沢山の人の後ろをついて行くことに。しかし何歩いても青山学院大学が見えず…完全に迷いました。でも田舎者だと思われるのが恥ずかしくて誰にも声をかけられない！でもここがどこかわからな

「本当ですか？でも鐘が鳴っちゃったし…」
「青学ではこの鐘は『幸せの鐘』って呼ばれててね、この鐘の音を聞いた人はみんな幸せになるんだよ」と。まさに絶望の中に見た天使でした。そして試験を受け、奇跡的に合格。青学の『幸せの鐘』は真実でした。

大学浪人時、ラジオ番組へ

高校卒業後、東京・立川の河合塾で浪人します。ここで人生で初めて寮生活というのを体験。そこで、寮生の並子ちゃんに声をかけられ、おしゃべりをしていたら、並子ちゃんが私とのトークを録音し、ニッポン放送『オールナイトニッポン』25周年記念オーディションへ送ったのです。実は彼女、昔からラジオDJになるのが夢だったとか。でもそのオーディションは約2万通の応募があり、有名な芸能人も参加。長野県のど田舎から出てきた私と、静岡県出身の並子ちゃんなんて…と思つたら、なんと決勝進出。まさかの優勝！

そこから『松永並子と北原ゆきのオールナイトニッポン』がレギュラー番組としてスタート。ちなみに忘れちゃいけないのが、私と並子ちゃん、この時、絶賛浪人中。本当に新しい世界でした。

その後、いろんなことが起こります。『オールナイト

い！しかも後15分で試験スタート。絶望とはこのことです。仕方なく「渋谷駅」へと戻り、駅のキオスクのおばさんに半泣きで聞いたんです。

「すみません。青学ってどこですか？」案の定、逆方向。あーもう試験に間に合わない…でも行くしかない、と宮益坂を半泣きでダッシュです。そして坂を登り切ると、夢みたいに見えたんです：青学の門が。合格したんじゃなかっただけでなく、嬉しい嬉しかったのを覚えています。しかし次の瞬間、試験スタートの鐘…。「あ…」

しかも試験会場は構内の奥。再び絶望し門の前で立ち尽くしました。すると、係の男子大学生が私に声をかけてきたのです。

「試験を受ける教室わかる？」
「わからないんです。涙」
「大丈夫。そんなに遠くないから間に合うよ」

ニッポン』の全パーソナリティで楽曲をリリース。人生初のレコードデイリングを体験し初めて自分が音痴だということを知りました。さらに番組で、受験時の青学の幸せの鐘エピソードを話すとリスナーの中に漫画家の方がいらして、私を主人公にした漫画の連載『東京BATSU天国』(集英社)がスタート。本当、人生は想像つきません。

助監督から構成(放送)作家へ

私は一度も会社に属したこと�이ありません。大学2年からシナリオ学校へ通い、その流れでVシネマの撮影現場で仕事。結局、そのままフリーランスで映画、ドラマの制作や助監督をやることに。『踊る大捜査線 THE MOVIE』など様々な作品で、母や友達にエキストラ出演をしてもらつたこともあります。

さて、私が構成作家になったきっかけは、まさに運命の出会い。助監督で入っていた映画『未来日記』の撮影現場に映画の構成を担当していた構成作家・高須光聖さんがいらしたんです。ダウンタウンの幼馴染みでTV界を支える有名構成作家。TVバラエティのポップな雰囲気と想像もつかない別角度の発想に衝撃を受けました。実はこの時、私にも「こんな作品やりたい！」そんな



助監督時代のカチココ

企画のようなものがあり（今思うと幼稚な内容）、何をどう勘違いしたのか、高須さんを見て何の迷いもなく構成作家になろうと決意したのです。

その後、日テレのドラマの撮影で生田スタジオにいた時に、運命の再会がありました。なんとそこには、私が『オールナイトニッポン』でお世話になつたチーフディレクターの姿が。ニッポン放送から日本テレビに転職したというのです。私が助監督をやめて構成作家になる決意を話すと、「じゃあ、構成作家の勉強に『特命リサーチ』に入る？」とお誘い下さつたのです。そんなことあります？本当にありがたいお話をしました。こうして構成作家としてのスタートを切つたのです。

地獄の寿司ネタダジャレ

構成作家は大きく分けて2つのタイプがあります。一番多いのは元芸人さん。「笑い」というのは一見感覚的なものだと思われがちですが実は非常に緻密なロジック（筋道）があり、本当に頭がキレないと作れないもの。そんなお笑いの第一線にいた芸人さんが構成作家となるケースが多く、周囲は才能のある方ばかり。2つめは私を含むそれ以外です。笑いのロジックを知る由もない私が作家になつたわけですから、もうチンパンカンパン。

そんな私を根気よく見守つてくださった周囲の皆さんには感謝しかありません。

『特命リサーチ』の演出に誘つて頂き、『香取慎吾の特上！天声慎吾』を担当しました。番組内でよくやつていたのが「ダジャレ」。会議では出演者たちを想定してスタッフがダジャレを作るのが常。演出が「右から順番に1人ずつ『寿司ネタ』でダジャレ言つてって」となると、もう地獄でした。右から左へスタッフはディレクター、プロデューサー、AD達が10人ほど。さらにお笑いモンスターの構成作家たちが6人ほど。ダジャレを最も不得意とする私は後半の方に座つていました。

「イカ、いかがっすか？」頭に浮かんだのはこれのみ。焦れば焦るほど頭は真っ白に。全員がダジャレで会議を沸かせる中、ADさんが私の「イカ」を言つてしまい、私の順番に。「すみません。思いつきません」。周囲失笑です。会議では他に「焼き肉のメニューダジャレ」「47都道府県ダジャレ」「山手線の駅名ダジャレ」と続きます。

「頭真っ白」作家こと北原にとつては本当に地獄でした。『頭真っ白』作家こと北原にとつては本当に地獄でした。

「誰かになろう」としない

構成作家になつたのは28歳。面白いことも、良い企画も思いつかないし、ダジャレは全然ダメだし、美人でも

ない、若くもない：「構成作家に向いてない」と数年悩んでいました。そして突然、35歳で気づいたんです。この焦りは、優秀な構成作家たちが、私に無いものを沢山持つているからだと。じゃあ「逆の発想」をしてみたらどうだろう？逆に、彼らに無くて私に有るものって何なのか？：実は奇跡的にあつたんです。

それは「おばさん」。モラルの低い言い方ですが、私はこれを自分の「大きな強み」だと気づいたんです。お笑いモンスターの構成作家たちは、背伸びしても「おばさん」にはなれない。やつた！私はおばさんだ！これだと確信。

テレビは時間帯などによつてターゲットの視聴者層が違います。そして私を含め、おばさん。はテレビの大學生ターゲット層で、私は視聴者に近く、私のおばさんらしさは他の人に無いものなのです。あーおばさん最高！つまり、お笑いモンスター構成作家の「誰かになろう」としなくていい、私は「自分になればいい」んだと気づきました。すると不思議。企画が通るようになり、自分の番組が放送される機会も増え、やつと構成作家のスタート地点に立つことができました。そして今に至ります。本当にここからが勝負です。

睡眠不足にて、ついうとうとと……



な事、全く気にならないです。大事なのは「何をして生きていきたいか」、そこに尽きるなど。苦悩も大事な過程ですね。多くの人に助けてもらっています。

そして今、人生で一番ワクワクしています。

毎日、仕事が面白くてたまらない！

今、本当に毎日仕事が面白くてたまらない

いんです。

日本テレビ『スッキリ』は番組開始の2006年から担当。ここ数年はエンタメ情報コーナーなどを担当。朝の情報番組ですが、いつも日曜夜のゴールデン枠を作つてゐる気持ちで取り組んでいます。どうしたら面白いのか？もつと笑えるのか？ 苦しみながらも、自分の「おばさん感覚」を信じ、楽しんでやつています。

企画書作りのスタンスにも変化が。ポイントは「どれだけその事を考えたのか？」私のような凡人構成作家は「どれだけその事に向き合つたのか？」でしか土俵に立てないと知りました。28歳の自分に言つてやりたいです。寝る時間が少なくても休日が無くとも全然OK。そんな

『スッキリ』エンドロールに「北原ゆき」の名が

